

一杯で、人里離れた山奥の抑留生活ではなすすべもなく、作業から帰ってみると熱発患者はすでになく、あの世の人、二度と仲間の顔を見ることもなく、友は淋しく死んでいった。

栄養失調者は増え「発疹チフス」は蔓延し、患者の食べ残しを食べれば、翌日は死が待つ吾が身と知りながら、極度の空腹には摂生の理性もなく、一刻でも良い、空腹を満たすことに我を忘れ、かくれて一気に飲みくだす姿は、まさに餓鬼道そのもの、翌日は、熱発数日後には無言の死を横たえ、悲しみのなかにもまたあわれであった。一日も早く日本に帰ることを念じ、幼い吾が子に会えることを、口癖のように唯一の楽しみにしていた友が、願いかなわず異国の地に帰らぬ人となった。

吹き降ろす吹雪のシベリアは寒かろう冷たかろうと祖国で一日千秋の思いで待つ父母や妻、幼子に永遠の別れをした友を今更ながら不びんに、はるか遠い遠い北の空をみつめ、生きてふたたび帰らぬ友の霊に静かに臉を閉じ合掌する。

ダモイ東京

和歌山県 土 永 勲

昭和二十年八月十五日、正午、重大発表ありとして、陛下の玉音を聞き日本の敗戦を知った。当時ハルビン第二教育部隊に勤務していたが、ハルピン飛行場において、武装解除をよぎなくされた。日本に帰国するのしらせで海林に集結したが、三か月ほど経ってもいっこうに帰国出来るようすもない。毎日のように汽車は走っているのに、こんなにも多くの軍人や民間人がどの方向に移動させられているのか、そのときの私たちには知るよしもなかった。

冬將軍の気配も濃くなった十二月もなかばに、やっと車上の人となった。貨物列車が動いて南下するので、ウラジオストック経由で帰国出来るのだとばかり思っていた。それは、私たちの思い違いで、列車は間もなく北に向かっていたのだ。途中、列車はニコリスクに停車し、

半日ほどしてまた動いた。それからしばらく私はまどろんだのであろう。十数時間は過ぎていた。私の感では、もうウラジオストックについてもよいころだと思って、そっと小窓を開けて見ると、太陽の日差しからあきららかに北上していることに気づいたので。ああ、どうしたことだろうと信じられない気持ちと、やはりだまされたのだという腹立たしさにもならない、なかばあきらめにも似た気持ちになっていた。また、数十時間過ぎて異様な音がする。閉ざされた貨車の中で聞く音であるので、始めは変な音に思えたのだが、それは鉄橋を渡っているのであった。

やがて列車はハバロフスクについた。勿論、私には當時は知るはずもない街である。ああやっぱりでここで我々はソ連に送られて来たのだという事をはっきり自覚しなければならなかった。私のシベリア物語は、この地から始まったといえよう。それまでは、おろかにもまだ「ダモイ東京」を信じていた私であったからである。

ハバロフスクより山林鉄道に乗り、かなり長時間の移動後、イズベストコーワヤについた。それから、また疲

れた足を踏みしめ踏みしめての徒歩行軍であった。それは、私たちの味わう厳寒地での初めての体験であり、羊の群の如くに追われ追われてのものであった。まる一週間にテルマにつく。ここがラーゲル生活の第一歩である。この一週間ソ連軍の監視兵に自動短銃をつきつけられながら、ダバイダバイビストレの掛け声で怒鳴られ、我ながらにあわれさと腹立たしさに、幾度か逃亡をと考えたことがあったが、よくよく考えてみれば、地理的にも道路と鉄道線路の外はツンドラ地帯で、今は寒期の凍りつく氷土を、食もなく半日といえども逃げることは不可能であり、死に直面することは明らかであることを知った。

ラーゲルでの一番目の作業は森林伐採であった。そこでのソ連人いわく「お前達を、日本に帰国させてやりたいが、日本から船をよこさないし、海が凍っていて船を動かす事が出来ないから、氷のとけるまでここに収容するのだ」と。私達は今更仕方なく木を切ってペーチカにくべる「マキ」を山ほど積みんだのである。幾日もかかって……。そして、くる日もくる日もラポーターは統

く。大木の伐採のために体力を消耗しながら、飢えと寒さに。その年が過ぎてても一向に帰国の話はありませんもない。

作業内容は鉄道の枕木を作ることに変わった。家を建てたり、山林鉄道の工事である。

ここで特筆しておきたいことは、毎日の食事のことだが、二百グラムほどの高粱の黒パンに、馬鈴薯と豆がちょっと浮いた様なスープのことだ。これでは栄養をたもてるはずもない。草の芽の出る頃になって、木のこけを海草のりと思つて食べたり、蛙をひきさいて焼いて食べる等。また或るときは、ソ連兵の自動短銃に見張られながら、ヤカゼ（日本の南天の実のような赤い実のなる植物）でビタミンの補給のために必死の努力をしたものである。それやこれやで満足な食事もなく、毎日がノルマノルマで追いまわされた。

その頃から、ある友は栄養失調であるために作業していてもうつろで、すっかり頑張ろうと励ます私の声も聞こえぬ気であった。その日から二日後に息を引きとった。なにしろ粗食で凍りつく寒波の中でのラポーターを

やり切つて来て、やっと木の芽の萌える頃になって、この現象が次ぎ次ぎと出はじめました。ある友は、今廁にいったがなと思つていたら、また廁いきである。そんな友に限つて死期が近づいていた。その友も二日後に亡くなつてしまった。

私が今日になつても忘れ得ぬ一事がある。それは、ソ連兵にも取られずに大事にしていた「奥さんと子供さんの写真」を私に見せながら痩せ細つた手で私の手を握り、若し生きて帰国できた時に、この写真を見せて私の死ぬ時の状況を伝えてほしいと頼まれたことです。「私はもう駄目だ」と言つて死んでいったその人の顔は、おそらく私が死ぬ時まで焼きついて目の底に残るのであろう。その時の励ましの声もむなしく数日後に亡くなられた。彼に頼まれた約束事として住所も聞いていたにもかかわらず、その後、ソ連兵に書いた物一切とともに取りあげられてしまったために、その約束事も果たせずにいる私にとって、罪の深さを感じておる毎日です。

ある友は、肺炎で薬もなく、洗面器でお湯を沸かせて暖を取れるようにしてあげたが、皆んなに伝える声もな

く死んでいった。当時この様なことは、今日人の身、明日は我が身としての毎日味わう実感であった。この様に書けば本当に切りがない……。

その当時のソ連側の身体検査は、まことに簡単そのものでお尻をひねって肉がついておれば、ラボーターハラショー（働ける）肉が少なければオッカー（体弱し）で二人での材木運びのラボーター（仕事）である。ある日、ノーチラポーター（夜間作業）で製材に出かけたとき、ずっと彼方に白い物が見えるから、暗夜を利用してソ連兵の監視の目を避けながらソツと見にくくと、驚いたことに日本人の亡骸を魚を積み上げる様に放置されていたのです。何たることだ、憤りと、あまりの悲しさで思わず怒鳴り散らしたい気持ちであった。翌日、早速ナチャヒクカマンジル（所長）にこの様子を話したのである。しかし、なかなか聞きいれようとしなかったが、しつように申し入れた結果、やっとしぶしぶながら埋葬を認めることとなった。凍り切った土を薪を燃やししながら五人一組で数か月かかって堀りおこし墓穴を作ったのであるが、なにしろ零下三十度から四十度の厳寒に、せめ

ても亡き友の遺骸を寒風と雪に野ざらしのまま、放置することなく埋葬して供養の誠をつくしたく、涙ながらの作業であった。

これ等の英霊の方々の死因は、栄養失調と下痢、肺炎等が主であったと聞く。我々はその後も転々とラーゲルをノルマ、カンチャイと共に移動させられて行った。ヤポンスキーダモイ東京だと云われながら騙され続けて……。四十数年過ぎた今も尚、母の名を叫び、妻や子供のを叫び、ダモイ東京だと大声で叫んでいるであろう「英霊よ安かれ」と心より祈ると共に、帰国後の後遺症に悩む病と葛藤の方々よ安かれと願う者の一人です。